

粘りづよく、泥臭く生きる

浜松市立新津中学校 二年 大桑 真白

中学二年生になり、自分の将来について考える機会が増えてきた。私は、自分がこれから送るであろう人生について、漠然とした不安を抱いていた。まだこれといった目標もなく、ただ普通に就職し、普通に働いて生きていくのだろうと、なんとなく思っていたのだ。この本に出会ったのは、そんなときだった。

舞台は、終戦後の日本。長く住んだ町を離れての、地方への引っ越しは、貴族のかず子と母にとっては、大変な苦労だった。それでも、なんとか落ち着いてきたころ、またも二人に困難が降りかかる。行方不明だった弟の直治が帰ってきたのだ。だが、直治はひどいアヘン中毒にかかっていた。さらに不幸は続き、家の金が底をつく。そして、貴婦人として美しかった母まで、結核でこの世を去る。こうして、かず子と母のかつての華やかな生活は、ボロボロにくずれ去ってしまうのだ。

と、ここまで読んだときは、人生の理不尽さ、残酷さがこの物語のテーマだと思った。だが、この物語には、まだ続きがある。全てを失い、人生の理不尽さに直面したかず子。苦しいばかりの人生に絶望し、このまま落ちてゆくかに思われたが、かず子は顔を上げた。古い世界の道徳に革命を起こすため、シングルマザーとして、強く生きることを決めたのだ。

「人間は、恋と革命のために生れて来たのだ。」これは、母の病の悪化で、苦しい状況に立たされたときのかず子の言葉だ。そんな状況とは思えないほどの、自信と希望に満ちあふれている。この言葉は、私

の胸を強く打った。今までの貴族として暮らしていたかず子は、すこし子供らしく、二十九歳とは思えないような女性だった。だが、このときのかず子からは、子供らしさなどではなく、大人の女性の強さを感じたからだ。こうしてかず子は、理不尽な人生の中で、強く生きる、太陽のような人になることを決意する。人生の苦しみを乗り越え、どん底からはい上がり強く生きる女性。これもまた、この物語の一つのテーマなのだ。

こうして、強く生きようとするかず子と反対に、自ら死を選んだ人間もいる。かず子の弟の直治だ。貴族を嫌い、貴族である自分を嫌っていた直治は、アヘンを使って、下品で自由な民衆を目指したが、なりきれず、居場所をなくして死を選んだ。貴族を嫌っていた直治だったが、最後には、貴族としてのほこりを胸に命を断った。

この二人の人生を、フィクションとは思えないほど、リアルに感じるのは、彼らがとても「人間らしい」からだろう。恋に苦しんだり悩んだりする姿から強い人間らしさを感じる。だからこそ、私はかず子の生き方に、深く感銘を受けたのだ。かず子の人生は、私も思い描いていた人生とは、全く違うものだった。かず子の人生は、とても壮絶だ。だが、そんな状況でかず子を選んだのは、とても険しい未来だった。私だったら、こんなリスクのある選択はできないだろう。きつと、たくさんさんの困難が待ち受けている。この時代は、シングルマザーに対する世間の目は厳しかっただろう。この選択には、きつととても強い勇気が必要だったはずだ。自分の信念のために、かず子がした、シングルマザーとして生きるという選択。私には、かず子がとても輝いてみえた。

この本の紹介に、よく「滅びの美しさ」という言葉が使われるが、私はそうは思わない。この物語を一言で紹介するならば、「強い生き

方」という言葉を使うだろう。理不尽な困難に直面しても、あきらめることなく、前を向いて進もうとするか？ 泥臭く、粘りづよく、自分の信念にもとづいて生きようとする彼女は、私の胸を強く打った。母としての強さ、貴族としてのほこり、曲げることのない信念を持った彼女は、きつと、シングルマザーとして強く生きていくだろう。あきらめず、粘りづよく生きる彼女の人生は、賢い生き方かと聞かれたら、そうではないが、強い生き方だと思う。泥臭い生き方のほうが人間らしい気がするのだ。私は、上辺だけの美しい人生よりも、強くたくましく生きる彼女の人生のほうが、ずっと美しいように思う。

この物語を読み終えた今、私の心には、澄んだ青空のような、清々しい気持ち広がっている。ぼやぼやとした人生設計が、少しだけ形になってきた。目標ができたのだ。これからの私の人生で、きつとたくさんの困難が待ち受けているだろう。逃げだしたくなるときもあるだろう。そんなとき、彼女のように、自ら困難に立ち向かって、乗り越えていきたい。私は、見せかけの美しい人生ではなく、本当に強く美しい人生を歩みたい。理不尽な人生に負けずに、泥臭く、粘りづよく生きたい。彼女のように、信念を持って行動したい。私は、か？ 子のような強い女性になりたい。この本を読んで、私の人生の目標が、今、新しく生まれた。

書名

斜陽

著者名

太宰治

発行所

角川文庫